

トップ > 新着記事 > みんなが知らない超優良銘柄 > 「国内最古の上場企業」がエコ住宅で最先端を走る歴史事情

みんなが知らない超優良銘柄

ベーシック会員以上限定の記事

「国内最古の上場企業」がエコ住宅で最先端を走る歴史事情

「どうする家康」の登場人物とも深い関係

田宮 寛之 2023/01/13 07:30



松井建設の名を広く世に知らしめることになった築地本願寺(写真提供:松井建設)

目次

創業はなんと戦国時代

社寺建築から一般建築を経営の柱に

新工法に取り組む

筆者は取材で学生にインタビューすることが多いが、学生の間ではベンチャー企業の人気が高く、老舗企業はあまり人気がない。彼らから見ると、老舗企業は古くさい「オワコン企業」なのだそう。

しかし、帝国データバンクによれば、日本企業の平均年齢は37.5年。実は、企業というのは長く存在するだけでもたいへんなのだ。

歴史ある企業は、それだけ多くの試練を乗り越えて生き残ってきたわけで、歴史の長さは企業としての実力を示している。今回は、国内上場企業約3900社の中で最古の企業、**松井建設(1810)**を紹介する。

創業はなんと戦国時代

松井建設の創業は天正14年。「大正」ではなく、「天正」。戦国時代末期の1586年だ。

同社の有価証券報告書の沿革欄は「当社は、現会長16代の祖、角右衛門が1586年前田利長公の命を受け、越中守山城の普請に従事し、引き続き藩公に奉仕して」という文章で始まる。

何と創業から437年も経過している。前田利長とは、加賀藩の始祖である利家の長男。初代・利家は豊臣秀吉の盟友として有名だ。

松井家は前田家より拝領した富山県井波の地を拠点に、戦国時代末期から江戸時代の終わりまで前田藩に仕え、その後も大正の初めまで社寺建築一筋に励んだ。



歴史を感じさせる「松井組」の看板(写真提供:松井建設)

豪雪地帯なので雪の重みに耐えられる社寺を建設しなくてはならず、技術力が鍛えられた。また、井波は「井波風」と呼ばれる特有の風のせいで火災が多く、再建工事をする機会が多かったことも技術力向上につながった。

転機となったのは1923年の関東大震災だ。東京帝国大学工学部建築学科を卒業後、東京で建築関連の仕事に従事していた15代・松井角平氏は関東大震災に遭遇する。

社寺建築から一般建築を経営の柱に

角平氏は建設業者として東京復興の使命を強く感じ、東京都京橋区入船町(当時)に松井組東京出張所を開設した。これを機に、社寺建築のみならず一般建築へと広く業容を拡大し、総合建設業としての基盤を築く。

その後、角平氏の大学の恩師・伊東忠太博士の推挙で、被災した築地本願寺の復興工事を請け負い、1934年に竣工した。インド様式を採り入れたモダンで荘厳な姿は芸術的であり、築地本願寺は東京の観光名所の1つに数えられ、松井組の名を一気に広めることになった。

戦後は、1947年に東京・成増でアメリカ軍用官舎を受注したのを契機に、一般建築の受注を増やしていく。戦前に東京へ進出していたおかげで、戦後の復興需要を取り込むことができたのだ。一般建築の分野でも技術研鑽に怠りはなく、アメリカ企業からコンクリートブロックの製造技術を導入して、それによる建築も普及させていった。

近年は病院や高齢者向け施設、学校などが主力で、ソーラー発電事業にも注力している。ちなみに、1990年に竣工した東京都庁第一本庁舎の建設にもJV(共同企業体)参加した実績を持つ。

戦後しばらくの間は社寺建築の需要がなかったが、1950年に文化財保護法が施行されたことにより、神社仏閣の再建ブームが到来。寺社仏閣を建築できる会社は少なく、松井建設に建築の注文が入るようになった。



松井建設が復元を手がけた金沢城の菱櫓・五十間長屋(写真提供:松井建設)

施工実績を見ると、築地本願寺、小田原城天守閣復興、中尊寺金色堂新覆堂造営、金沢城菱櫓・五十間長屋復元、熊本大学五高記念館他災害復旧など、著名な建物が目白押しだ。

新工法に取り組む

2020年10月、日本政府は2050年までにカーボンニュートラルを目指すと宣言した。今後、住宅・建築物に関する規制は強まっていく。この流れを受けて、松井建設はZEB、ZEH-Mの実績を積み重ねている。

ZEBとは「ネット・ゼロ・エネルギー・ビル」の略で、ZEH-Mとは「ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス・マンション」の略。どちらもエネルギー消費量の収支プラスマイナス「ゼロ」を目指す建物だ。

ZEBやZEH-Mと並び取り組んでいるのが、合板の一種であるCLT(直交集成板)を活用した大規模木造建築。CLTとは薄い板を繊維方向が直交するように重ねて接着した木質系材料であり、高断熱・高耐火・高耐震といった特徴がある。木造で中高層建築は不可能とのイメージがあるが、CLTなどを活用すれば可能だ。

木造建築は建築過程も建築後も環境に優しいことから、日本でもCLTを活用した大規模木造建築が増える見通しだ。社寺建築を得意とする松井建設にとっても、大規模木造建築は親和性が高く、森林資源の循環利用など、サステナビリティへの貢献度も高い取り組みである。

同社は2022年11月に本社ビル別館をCLT工法で完成させただけでなく、北陸支店の社宅兼社員寮をCLT工法で建設中だ。今後はこうした実績を生かしてCLT建築を増やしていくだろう。

松井建設は戦国時代に城の建設で創業し、平和な時代には社寺建築を手がけ、大正時代以降は一般建築に取り組んだ。現在でも社寺建築用の伝統工法を有しながら、最新の建設技術を駆使してカーボンニュートラルに取り組んでいる。建設業という本業から決してぶれず、長期間技術を磨いてきたことが松井建設の強みであり、他社にはマネできない強みといえる。

(東洋経済 記者)